

1. Accessibleガーデンによる共生の街づくり

高齢者の庭づくり研究会
(北海道旭川市)

1. 活動の背景と目的

大雪の山並に抱かれた旭川市は、花と緑がととてもよく似合う清々しい街である。

一方、全国的に進みつつある市街地の過疎化が旭川市でも静かに進行しており、郊外へ伸びる住宅地とは対照的に、寂れた町並みが散在している。

そこで我々は、花で街を彩り、花で人々のところをつなぎ連ねていくことは、“元気の源”ともなって街の発展・再生に大きく役立つのではないかと考え、花で連なる街づくりを合言葉として「花連（はなれん）ノスタルジア旭川’99」を結成した。我々「花連」は、過疎化の進むJR4条駅周辺の商店街に場所を定め、そのような地域に住む人々がなんとか街を離れることなく暮らしていけるように、文字通り「花連＝離れん」の言葉をかかげて活動を始めることにした。そして、「交流促進」、「環境美化」、「健康増進」の三つの側面からアプローチすることで、新たな街づくりに挑戦することにした。

●本活動の3本柱

①交流促進－「広場」の創出

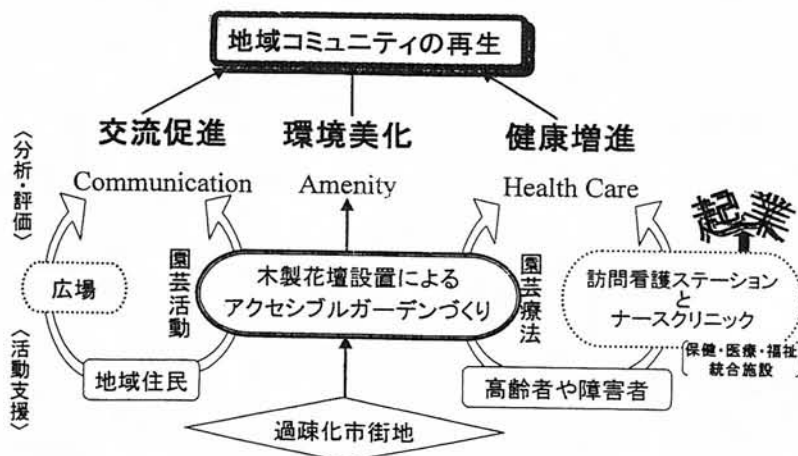
今回、特に過疎化の進む市街地の活性化をねらいとして、第一に「広場」の創設を提案し、地域の核としての「広場」が、コミュニティに属する人々の交流促進や、住み慣れた地域に活気を取り戻すための「場の提供」を検討した。

②環境美化－「花壇」の設置と花と緑

「花壇」での園芸活動によって視覚的にも優れた花壇を設置することができれば、環境の美化と新たな空間創出の第一歩となり、美しい花壇とそこに植えられた植物は、活気を失った地域に彩りを添えることにつながるのではないかと考え、路地に屋台式木製花壇を設置することにした。

③健康増進－「健康相談室」の設置と園芸療法の実施

今回、我々は新たな試みとして、コミュニティに属する人々の心身社会的側面からの健康の維持・増進を目的とした「健康相談室」を設置した。また、健常者も障害者も共に園芸を通じて健康づくりに生かせるように、園芸療法を定期的の実施し、その効果や意義を検討したいと考えた。



II. 活動の内容

- 4月22日 Accessible ガーデン設置場所の検討。
市街地での過疎化が進むJR旭川4条駅周辺の商店街の活性化と環境美化、利用者や地域住民の健康増進などをねらいとして、JR旭川4条駅前広場をAccessible ガーデンの設置場所に決定する。
今回の活動母体として「花連・ノスタルジア旭川'99」を組織化するために学識経験者や行政、関連機関や業種への働きかけを開始する。
- 4月27日 JR北海道旭川支社を訪ね、本活動の理解と協力を求める。土地の使用に関する手続き等の説明を受ける。
- 6月28日 屋台式木製移動花壇－Yatai 完成。
- 6月29日 園芸活動参加者募集及びボランティア募集のポスター、チラシを掲示する。



屋台式木製移動花壇



健康相談室

- 7月14日 STV ラジオ番組に出演し、本活動についてPR。
- 7月16日 活動開始：毎週金曜日の13時から15時までの間、屋台式木製移動花壇を用いて、Accessible ガーデンづくりを始める。また、元保健婦や看護婦のボランティアによる健康相談室を開設。
- 8月12日 旭川保健所を訪ね、今回の活動について説明する。
- 8月21, 27日 STV テレビの取材を受ける。
- 9月9日 STV テレビ18時30分からのニュースで今回の活動について放映される。
- 9月29日 旭川駅長を訪ねる。元切符売り場の部屋を健康相談室として借り、冬期間の活動拠点にする。
- 10月3日 バージニア州立工科大学教授 ダイアン・レルフ講演会「人生を豊かにす

る園芸の役割」開催（主催：高齢者の庭づくり研究会）。（北海道経済連合会事業助成による）

10月14日 第1回花連・ノスタルジア旭川'99検討会開催。（参加者17名）

10月15日 元切符売り場での健康相談活動を開始する。

12月3日 元切符売り場での健康相談活動を終了する。

Ⅲ. 活動の効果及び今後の課題

1. 活動の効果

今回の活動では、Accessible ガーデンづくりを通じた地域活性化が主な目的であったが、さらに健康で安心して暮らせるという生活条件を満たすものとして、特に健康相談室の設置を試みた。Accessible ガーデンづくりは、7月から10月までの3ヶ月間実施し、参加者はのべ46名であった。健康相談室は7月から12月まで開設し、利用者はのべ71名であった。運営に携わったスタッフ、ボランティアはのべ91名であった。



プランターにおもいおもいの花を植え込む

Accessible ガーデンづくりでは、路地での園芸活動に適した花壇をデザインし、新たな着想で屋台式木製移動花壇を製作した。屋台式木製移動花壇は既成の大小プランターとともに、赤や黄色、あるいは淡いブルーの花々で華やかに彩られ、コンクリートの路地は次第にその空間イメージを変えて、環境美化に多いに役立ったと言える。それらの花や植物は、次週まで路地に置かれたままの状態でも経過したが、地域住民の人々によって大切に管理された。また、盗難やいたずらなど当初懸念されたことも一切みられなかった点は、特記されるべきことがらと思われる。

健康相談室の試みについては、健康管理に関する相談が最も多かったが、病院受診の必要性や受診科の選択に関する相談なども多かった。また、寄り合い所的な機能も果たすなど、簡便かつ多様なニーズに対応できる地域住民のプライマリーケアの拠点としての可能性が示唆された。

この他、本活動を契機として、地域住民の意識にも変化がみられている。商店街組合の理事長が中心となって、今回の活動を単年度のものとして終わらせることのないよう継続可能な手立てについて行政関係者に働きかけたり、話し合いの場に出向くなどの行動につながっている点は、われわれのユニークな活動のひとつの成果として、大いに評価できるものである。

また、新聞、テレビ、ラジオなどマスコミに度々取り上げられるなど、本活動に対する社会の関心は高かったと言える。

2. 活動の問題点および今後の課題

今回、我々は「Accessible ガーデンによる共生の街づくり」の企画に際し、「花連・ノスタルジア旭川'99」を新たに立ち上げて、学識経験者や行政関係者、関連機関・業種の関係者とともに、広く一般市民の理解や関心を求めるように活動を進めてきたが、このような活動では、対象とする場の選定や地域住民の理解や協力をいかに得られるかということが活動の成否を左右する重要な要素としてあげられる。また実際の活動に際しては、旭川市水緑公園課、旭川市農業センター、道北造園建設協会、ハーブ苗販売業の方などからの花の苗の提供があったことや一般市民や学生ボランティアの協力によって、本活動が支えられてきたと言える。

今後は、本活動の将来設計を見据えた段階的かつ具体的計画を立案し、人材や資金の確保、バックアップ体制を明確にしていく必要がある。そのためには、支援可能な団体や個人の掘り起こしを進めていくことや定期的に検討会を持つことなどが有効な手段として考えられる。



ちょっと疲れて一休み、寄り合い所としても活用